ゐのはな

千葉大学医学部同窓会報　第84号　題字　鈴木五郎

編集兼発行者
千葉大学医学部
ゐのはな同窓会報編集部
〒280 千葉市亥鼻1の8の1
千葉大学医学部庶務係気付
電話千葉(0472)22-7171内線2038

昭和五十八年度 ゐのはな同窓会 総会開催される

昭和58年度ゐのはな同窓会総会は、6月18日(土)、皇居前、パレス・ホテルに於て、東京ゐのはな会担当の下に行われた。午後3時より、本部総会に先立ち、東京ゐのはな会の総会が行われ、会務報告及び、決算、予算案が原案通り可決された。東京ゐのはな会も、会員数、一千名を越え、基金も終身会費制の導入によって、徐々に増加しており、順調な発展をしている。

さて、本部総会は、午後4時より、小林会長、井出学長の挨拶により始った。萩原医学部長の医学部近況報告、村山常任理事より会務報告があった後、物故者65名に対し、黙祷を捧げた。次いで議事にうつり、小林会長を議長として選び、昭和57年度決算、及び昭和58年度予算案が提出され、石川常任理事より説明があり、いづれも原案通り承認された。嶋田副会長の閉会の辞によって無事総会は終了した。

総会講演は、「これからの我が国の医療環境」と題して、本学出身のN・H・K医療番組チーフ・ディレクター、行天良雄氏(昭和24年卒)により行われた。その要旨は次の如くであった。

○医療におけるこれからの影響

(1)疾病構造の変化

高令化により、病人の構成、病気の質が変る。

(2)技術面の変化

電子工学、光通信による高度情報システムが医療の先端技術を変え、治癒(キュア)という事から看護(ケア)という事に医療の流れが変るだろう。

(3)皆保険と医療動向の変化

大規模医療、高度医療機関に患者が流れる。特に大都市で顕著となるであろう。

○日本の高令化の特異性

老令化のスピードが早く、現在10%弱の老令人口が、今世紀末には14%を越えると予想される。先進国では12%程度で給付と負担のバランスがくずれ、主力は医療から年金に移るといわれている。しかし健康教育の徹底と自助感覚が出て来て、負担は少しづつ減るという考え方もある。

○医療動向の底流

(1)医療財源の収支失調と新方式模索

現在G・N・P比5%の医療費は、経済面からすれば、7%がリミットと考えられており、出来高払いは、現在の様な形では維持出来なくなるであろう。

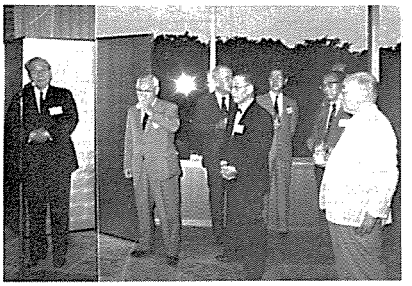
(2)医師の供給安定乃至過剰

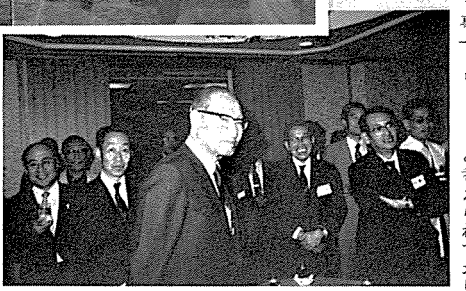
現在人口10万当り150を越えているが、やがて180の充足数に達するだろう。将来は病院勤務医が50%、開業医25%、医育機関9%、あとは民間のプログラマー、遺伝子工学、ライフサイエンス、労働保険医等が次第にふえると思われる。又衛生行政に従事する人も増加するだろう。

この有益な講演を伺って、文字通り、医療を取り巻く環境の厳しさを、ひしひしと感じたし、一方灰色の大空の彼方に、僅かに青空がのぞいている様な、そんな気もした。

引き続いて行われた懇親会は、山崎城東医師会長(昭和19年卒)の司会の下、御出席の香月放送大学長、相磯元学長から、我々が教えを受けた頃と変らぬ御元気さで、ユーモアを混えたお話を伺い、又会場溢れんばかりの100名を越す出席者の中では、比較的若年の井上整形外科教授、厚生省の北川公衆衛生局地域保健課長(昭和31年卒)のお話もあり、和やかな雰囲気の、近来にない盛会であった。東京、下町得意の二献の中締めの手の音と共に、次回、千葉の総会えと引継いだのであった。

(神田尚忠記・昭32卒)





総会々場風景

実験動物施設 体育館 サークル会館 完成祝賀会開催される

会報第82号に写真を掲載した千葉大学医学部附属実験動物施設の建物に続き、去る3月末には極めて近代的な体育館(一階は武道場、二階はバスケットボール、バレーボール、卓球等の多目的体育館)が新築され、同時に旧精神科の建物が学生の各部活動のためのサークル会館に改装されクリーム色の見ちがえるような建物に変った。これらの新築、改築の完成を祝う祝賀会が、風まさに薫る去る5月21日(土)午後、新営の体育館で開催された。村山智教授の司会により井出学長、萩原医学部長の挨拶、石黒施設部長の工事経過報告、この事業の推進に力をつくされた前学長、香月放送大学長や文部省関係諸官の祝辞等々がすすめられた。ゐのはな同窓会小林金市会長の設備の乏しかった昔の学生生活を偲んでの祝辞は感銘深かった。これら建物が単に医学部のみならずゐのはなキャンパス全体により利用される意味を含めて、新井生物活性研究所長、見藤看護学部長のお二人により鏡割りが行われ、祝盃の音頭は米沢附属病院長がとってにぎやかな祝宴に移った。同窓会員の出席も多く、明るい体育館一杯にいつまでも交歓がくりひろげられた。月日と共にいよいよこれら建物の利用は活長を呈している。

会計報告

昭和57年度 決算報告

A 収入の部

科目	予算額	年度末収入計	差引高（△減）
財産収入	300,000円	397,108円	97,108円
会費収入	5,000,000	5,877,822	877,822
事業収入	6,000,000	8,144,800	2,144,800
寄附金	100	123,382	123,282
繰入金	0	0	0
繰越金	2,616,793	2,616,793	0
収入計	13,916,893	17,159,905	3,243,012

B 支出の部

科目	予算額	年度末支出計	差引高（△減）
1. 事業費			
会報発行費	650,000	448,304	△201,696
名簿発行費	5,500,000	6,039,600	539,600
新会員歓迎費	300,000	300,000	△0
顕彰奨学費	200,000	0	△200,000
慶弔費	80,000	32,420	△47,580
支部連絡費	300,000	183,760	△116,240
小計	7,030,000	7,004,084	△25,916
2. 事務費			
備品費	30,000	0	△30,000
消耗品費	150,000	88,570	△61,430
通信印刷費	2,000,000	1,829,940	△170,060
振替手数料	200,000	191,050	△8,950
会議費	100,000	35,976	△64,024
諸手当費	1,100,000	1,056,500	△43,500
謝金費	100,000	78,850	△21,150
小計	3,680,000	3,280,886	△399,114
3. 予備費			
基金繰入額	2,500,000	2,500,000	0
予備費	706,893	143,120	△563,773
小計	3,206,893	2,643,120	
支出計	13,916,893	12,928,090	
繰越額		4,231,815	

基金　12,000,000＋2,500,000＝14,500,000

昭和58年度 予算案

A 収入の部

科目	予算額	前年度比(△減)
財産収入	300,000円	0円
会費収入	5,000,000	0
事業収入	0	△6,000,000
寄附金	100	0
繰入金	0	0
繰越金	4,231,815	1,615,022
収入計	9,531,915	△4,384,978

B 支出の部

科目	予算額	前年度比(△減)
1. 事業費		
会報発行費	650,000	0
名簿発行費	610,000	△4,890,000
新会員歓迎費	300,000	0
顕彰奨学費	200,000	0
慶弔費	80,000	0
支部連絡費	300,000	0
小計	2,140,000	△4,890,000
2. 事務費		
備品費	30,000	0
消耗品費	150,000	0
通信印刷費	1,800,000	△200,000
振替手数料	110,000	△90,000
会議費	100,000	0
諸手当費	1,200,000	100,000
謝金費	100,000	0
小計	3,490,000	△190,000
3. 予備費		
基金繰入額	3,500,000	1,000,000
予備費	401,915	△304,978
小計	3,901,915	695,022
支出計	9,531,915	△4,384,978

基金　14,500,000

日本学術会議の改革

新聞紙上で度々報道された如く、日本学術会議の機構改革がおこなわれることになり、今後は学術研究団体からの推せん制度に改められることになった。

第十二期会員として活動されて来た生理学（第一）の本間三郎教授の任期は、本来ならここで切れる筈であったが、改革の移行期の間、約一年半延長されることになり、昭和六十年夏頃までひき続き会員として活躍を続けられることになった。

本会報の四頁「35才になったモグラたち」（昭和23年9月卒クラス会の記）の記事中にみえる東京医科歯科大学の窪田金次郎教授（歯学部・解剖学）の出馬も機構改革後までしばらく延びることとなった。

生物活性研究所 改組10周年を祝う

—第1回国際生物活性シンポジウム—

生物活性研究所では、腐敗研究所より現名称に変わり改組を行ってより10年を経たことを記念し、第1回生物活性シンポジウム「菌糸状微生物——感染、中毒症ならびに治療」を去る9月5日、6日に開催した。会場である千葉市民会館は外国人研究者の参加も多く活況を呈していた。6日夕には、ロイヤルプラザホテルで国際色豊かな記念式典と懇親会が開催され、新井所長以下10年の歩みを感慨をこめて語った。

池田英雄先生（昭6年卒）——美挙

長野県上田市の池田英雄先生は、内科開業50周年を記念され、また、まもなく80才を迎えられることを喜びとされて母校のために何かのお役にたちたいとのお志よりこの度金百万円をゐのはな奨学会に寄付された。ゐのはな奨学会は医学部、薬学部の学生、若手研究者等への援助等でいよいよ重要な存在となっており池田先生の美挙の意義は大きい。

第60回 千葉医学会学術大会
第29回 千葉県医師会学術大会
第22回 日医医学講座 連合大会開催される

昭和58年10月15日(土)、千葉県医療センター講堂にて開催された。

プライマリ・ケアの概念をめぐって
—あたらしい医療を求めて—
実地医家のための会　永井友二郎

高血圧症治療の最近の動向
横浜市立大学医学部内科学教授　金子　好宏

の2つの講演がありきわめて盛会であった。

本年度（昭和五十八年度）の同窓会費（二千円）未納の方は是非お納め下さるようお願い申し上げます。振替用紙を同封申し上げます。

昭和19年卒業生クラス会開催

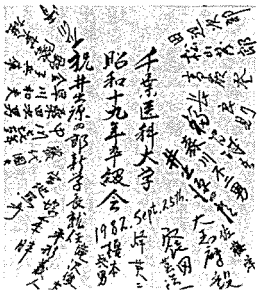
昭和57年9月25日(土)、千葉市東天紅にて、昭和19年千葉医大卒クラス会を開催しました。

参加者25名で、遠くは長野、静岡、群馬、栃木から馳せ参じ「やー」「おー」といいながら再会を喜び合った。

世話役桑田君の挨拶があり、物故者の名前を読みあげ、冥福を祈りつつ黙祷を捧げた。卒業後40年近くになると幽明境を異にする者が16名にも達しており、今更ながら時の流れを感じた次第である。

新学長井出君のユーモラスな挨拶を始めとして、各自近況を話し合い、平形君のお祝いとしての仕舞は圧巻であった。和気藹々とした歓談2時間余、来年の再会を期して宴を閉じた。

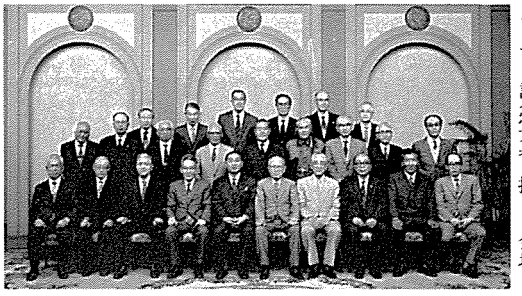
文責　石川　清



昭八会クラス会

昭和8年入学の我々昭八会は昭和58年4月10日(日)、入学以来50年を記念し、千代田区半蔵門の東條会館に於て開催、25名の参加者を得て極めて和やかに且つ充分満足のゆく会を持ち得たことを、幹事としての責任を果し得、肩の荷を下ろした思いである。

卒業時80名のクラス・メートも年々減少し案内状を出した数は43名、内出席の返事のあった者27名(内2名、菅井規矩雄君は急用のため、又川北良平君は急病のため欠席)、欠席の返事は15名、返事のなかった者1名であり、遠くは札幌及び名古屋よりの参加者もあり1人の遅刻者もなく全員定刻に参集した。会場が戦前より写真で有名な東條会館なので、会に先立ち態度が余り乱れないうちにということで、記念写真を撮り、会場を6階の宴会場に移し、昭和57年度死亡の菅能庸一君、藤縄謙蔵君、田中直三君及び関根実君以上4名の方の御冥福を祈り黙禱をさゝげ、終って、和気藹々の内に会をすゝめ、各人の近況などを披露し合い、又来年の幹事(尾本芳次君)を選出し、極めて有効な半日を過ごした次第である。



今回幹事を引き受けて感じたことを二、三列記すると、

一、先づ第一に出来るだけ多数参加して貰いたい。そのためには集り易い東京が良かろうと思った。

二、年々会員が減少することへの対策

(イ)夫人同伴はどうか。

(ロ)昭七と昭八、或は昭八と昭九合同のクラス会はどうか。

三、会場の都合で4月10日となったが、今年は行われなかったが、例年交通ストの行われる時期であるので、確定申告もすみ、又孫達の進学、卒業も一段落する3月末がよいのではなかろうか。

当日の参加者氏名

石川洋、稲生芳文、稲田武夫、飯田政雄、植竹順、恩田光明、小沢達也、小川象一、大塚潔武、尾本芳次、岡村正明、河村謙二、小泉寿、佐藤譲、鈴木敏、住田満也、千葉保次、日向秀夫、久富良次、水野秀一、水野有文、横山達雄、蕨彰、綿貫重雄、上川名誠一

追記

東條会館の専務取締役副社長浅野忠宏君は小生(上川名)及び植竹君の出身校東京高校の同期生、彼は文甲、小生等は理乙で毎年春秋2回、文理合同クラス会を浅野君の肝煎りで同所で開催しています。植竹君、上川名の名を出してどうぞ御利用の程をとの浅野君からの伝言です。

(本年度幹事　上川名記)

八千会ニュース

去る5月21日、卒後32年(第21回)八千会(破船会)が、京都・吉水庵で開催された。附属医専八回生の同窓会である。30周年記念集会を契機として、ますます同窓会の意義が再認識され、この日も19名(家族2名、ゲスト1名を含む)の出席があった。(同窓生現在員40名)

総会の話し合いの中で、「同窓生の中には孫を持つ者も漸次ふえつつあり、近く還暦を迎える仲間もある。このことをふまえて、40周年といわず、35周年を記念集会として、またひとつの節をつくりたいと思うがどうか」という会長の提案がなされ、一同賛同。また1年先輩の七葉会の方々、また九回生からも、是非八千会と一緒に集会をもちたいが、という呼びかけのあることが明らかにされ、とくに九回生の中には、我々と同質の(戦乱の結果、集められた)仲間が数多くいることも配慮して、時には、そのような会もよかろうとの前向きの姿勢で、詳細は幹事会に一任するとの結論を得て採択された。

宴会は、なごやかに、昔話と近況と、さらに今日の状況を如何に生き抜くかの、はてしない語らいでにぎわった。一次会を終った後京都の街へ、大阪へと三々五々と散って、夜更まで思い出深い一夜を過した。今回の幹事・河野　裕(大阪在住)、会長・森　亘敬、常任幹事・大田和明。

(広報担当・石川鉄男)

昭和33年卒業25周年記念会

昭和33年度卒業生のクラス会が、昭和58年6月18日千葉市のほてい家において開催された。25周年記念会ということで、出席者は80名中50数名に及び、加えて当時御指導を頂いた谷川久治、柳沢利喜雄、小林龍男、竹内勝、中山恒明、川喜田愛郎、筧弘毅、百瀬剛一、横川宗雄の諸先生方の御来臨を賜わり盛会をきわめた。参加する者は北海道から沖縄に至り、さらにはアメリカから石川行一君、ドイツからは高野光司君が馳せ参じた。かえりみると、卒後¼世紀を経ているにもかかわらず――少数の例外を除き――往時の面影をそのままにとどめる者が多く、ことにこの傾向は女性軍に顕著であったが、ともあれお互の壮健を視して乾杯を重ねた次第であった。しかし、恩師の諸先生からわれわれの世代が現代医学、医療に果す責務の重要性をこもごもさとされ、一同知らぬ間に加えられた年輪の重みをあらためて実感した。

記念としては、医学部構内に植樹することが議せられ、最後に当クラス会の発展と、恩師の方々の御壮健を祈念して会を終えた。

(近藤洋一郎記)

昭和28年卒業30周年記念クラス会

昭和28年度千葉医科大学卒業、30周年クラス会を去る7月9日(土)東京赤坂プリンスホテルで開催した。当日長つゆの影響か、開催時間の午後3時頃まで、濠雨の悪天候であったが、恩師の竹内勝・小林龍男・松本胖・北村武の各先生の御出席を頂いて、60余名が集い、卒業以来という者もあり、30年の時間を考えながら話題は限りなく、

盛会であった。

今回も小澁雅亮君にホテルとの交渉、会の進行等御世話願った。我がクラスの者も50才のなかばを過ぎ、1日でいうと午後3時頃と評する者もいた。これから夕方、夜にかけて活躍する者も多いだろう。田中穣・山田達哉・鈴木正巳・鈴木正一・塚本勉の諸兄は二世が千葉大学医学部に在籍しており、立派である。将来が楽しみである。時間の経つのを忘れて、楽しい雰囲気に終始して、午後7時頃、再会を約し散会した。なお記念事業としてゐのはなキャンパスに植樹その他を行うこともきめた。

（奥井勝二）

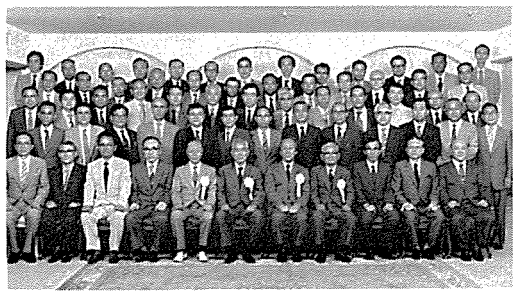
『35才になったモグラたち』

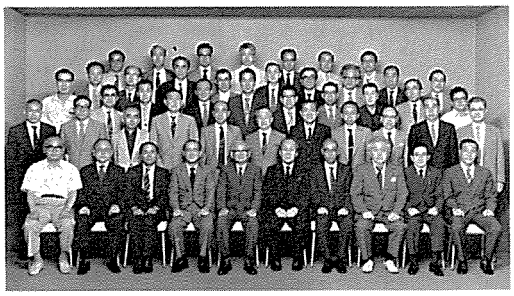
昭和23年9月、戦争の焼跡も生生しい亥鼻台のくずれた防空壕で生れたモグラの一群46匹が、昭和58年8月20日夕方、銀座東急ホテルに集ってきた。

112名（卒業時131、物故19）がすべて連絡可能、という団結に力をつくす萩原（医学部長、脳研）の司会で、幹事団苦心の作のスライドを多数上映し、「最近の母校」と題した基調報告を吉田（亮）（公衆衛生教授）が行ったあと、最近物故された恩師、羽里、岩津両先生と、横田俊一君の霊に黙祷、ついで遠路御出席下さった恩師、小林、北村両名誉教授の、想い出と近況のお話があった。

ついで遠来の小西（長野、病院長）発声で乾盃のあと、これも遠来の五ノ井（福島県立病院長）、平岡（沼津市立病院長）、「モグラ会」の命名者小林（蘇我病院長）はじめ、全員が近況と回想のスピーチを行った。ことに窪田（医歯大、解剖教授）は、来る学術会議選に出馬の決意を語り、全員拍手で支援をきめた。

5年前の卒後30年記念以来の再会なので、三昔半前の紅顔そのまま、オレ、オマエの声がビールの泡と共に飛びかい、北村、小林両先生がこもごも、「個性豊かでユニークな想い出の多いクラス」と仰言れば「先生に搾られた。」「否その覚えはない。」の問答や、果ては「運動部活動や学生運動でサボってばかり。」「学生時代は先生の顔をよく知らなかった。」と白状する者など、かず〳〵の想い出話がはずんだ。





ちなみに欠席者も含めての近況をまとめると、モグラ達は各方面で油の乗りきった活躍中で、伊東（宏）、井上、戸沢、松山はじめ、全員の半数は開業で、病院経営やプライマリケアの第一線で奮斗すると共に、中央・地方医師会の幹部、中枢として指導的立場にある。残り半数のうち、国公私立病院には、市川（国立がんセンター院長）、上野（同横浜東院長）、有賀（同習志野院長）、高木（深谷日赤院長）、伊東（和）（国立千葉副院長）ほか、院長、副院長、部長として20余名、研究・行政面には、吉岡（勇）（北里研部長）、荻野（公衆衛生院図書館長）、松浦（社会保険審委員）など数名がある。教職には、母校に萩原、吉田（前出）、石川（清）（衛生）、中島（小児）、山口（看護成人）の5名と、他県に、小倉（東北、歯学部長、薬理）、東條（筑波、学群長、内科）、黒須（東邦、病院長、麻酔）、堀江（独協、外科）、窪田（前出）、加藤（防衛、産婦）、波多野（金沢、がん研）、広瀬（癌）（ニューヨーク大、外科）の8名の計13名の教授連と数名の助教授、講師がおり、「花の23年組」の活躍の全貌が明かになった。

かくして、モグラたちの3時間がアッという間に終り、次回幹事中村（敏）（長生病院副院長）に期待しながら、それぞれの巣に帰っていった。

（追記）記念植樹の花水木は、石川（清）の丹精で、本館（旧病院）前動物実験棟正面に、元気に生育中である。

（山口記）

第37回ゐのはな四葉会（昭和20年医専卒）

一、日　時：昭和58年10月15日
二、場　所：長崎市丸山
　　料亭〝花月〟
三、参加者：長崎リハビリセンター学院長、長崎大学、高知女子大学名誉教授、安中正哉先生（昭5卒）御夫妻以下40名（内13名は御夫人）

〝来年は俺が幹事…〟と先生が言われたのでお言葉にあまえ一同張切って長崎へ。〝花月〟は坂本龍馬曽遊の家、重要文化財で最高の格式を誇っているが、先生のお顔で予約出来た。

翌日は長崎市内見物から雲仙、島原を経て熊本一泊。10月17日熊本市内見物の後阿蘇へ登る。さすが世界一とあって感嘆只感嘆。

安中先生御夫婦極めてお元気で我等青年の遠く及ぶ所ではない。〝来年は金沢で〟と誓い合って開散。

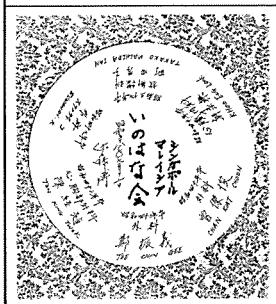
（末永直光記）

マレーシヤ シンガポール ゐのはな会

私は昨昭和58年7月教室出身のマレーシヤ・ペナン市で開業している鄭振義君の御世話でマレーシヤ・ペナン並びにシンガポール医師会で講演する目的でマレーシヤ並びにシンガポールに出かける機会に恵まれた。そこで当地で活躍している千葉大卒の皆さん達とのお話し会を持つ事が出来、当地の千葉大出身者の大方の望みは母校である千葉大のニュースに殆んど接していない事、並びに母校との連絡をどの様にすればよいかと云う事であった。そこで、私が此の拙文を同窓会報に投稿して、之を皆さんに送り、以後之を続けて行きたいと云う事である。当地で活躍している先生すべて成功しておらるゝ様でほんとうにめでたい事と思う。マレーシヤでは一人、シンガポールでは五人の先生方であった。そのときの寄せ書を載せて戴ければ幸甚である。マレーシヤ・シンガポールの皆さんも之を機会に大学新聞に寄稿されん事を切望いたします。

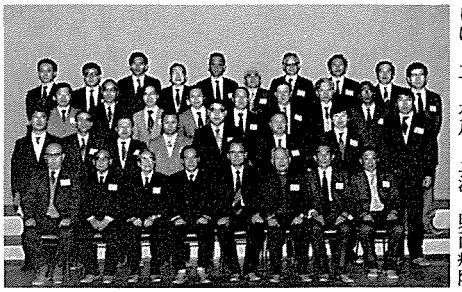
マレーシヤ・シンガポール
ゐのはな会メンバー

○町田孝子（シンガポール）
放射線科・昭37年卒
○邱永楽（シンガポール）
心臓内科・昭40年卒
○曽傑俊（シンガポール）
外科・昭40年卒
○鄭振義（マレーシヤ）
外科・昭41年卒
○陳経趣（シンガポール）
心・胸部外科・昭42年卒
○スワンディ・コ（シンガポール）
外科・昭47年卒
二外・佐藤博記
（昭20卒）



第69回茨城県ゐのはな同窓会の記

とき：昭和58年2月10日(日)
ところ：土浦市霞月楼



土浦市当番幹事茂在豊喜君（昭20卒）から同窓会本部との連絡はと電話があった時即座に小生が交渉すると答えた。それには訳がある。昨春の四金会主催の叙勲祝の夜の私への大もてなしが余りにも嬉しかったからである。井出学長は何をおいても同日は出席するという力強い承諾であった。同行した奥井教授は土浦市出身で会場霞月料亭とはほんの近い所が御実家で知人も多くお里帰りの気楽さに見えた。午後2時開会。本県には170人余の同窓生が現存し、現在筑波大学は千葉大学の分校のように20数名の教授、助教授以下研究員が居られ、鹿島には労災病院が数年前に開設されて千葉医大からの派遣勤務医が多数、古くの同窓生には日立、水戸、土浦、県西病院それに県下各地で開業されておるのである。大正年間はゐのはな同窓会の全盛時代で県医師会長も福地幸彦（明33）、角田愛治（明35）、川並要（明42）、渡辺健（大6）国会議員、その他県医師会副会長、市・郡医師会長など多数の県医政ポストを占めていた。最近は学問技術の先端をゆく筑波医大に負う処が多く開業医は病人を診る方にまわり吾が同窓会を両者相和して点の医道を邁進する姿にしたいとも考えている。井出学長は昨秋の学長選挙で1700票がくしくも折半に割れる劇的シーンに出合ったことや腸内無菌と普通マウスに発癌物質を投与して一般マウスが早死し癌発生が多発することを認め腸内菌叢の複雑さと腸癌発生転期のむづかしさを嘆ぜられました。奥井教授は大学の近況をスライドを通して叮寧に説明、矢張り腸内の癌発生の研究にも言及された。出席会員は34名、筑波の岩崎、牧、長谷川、小泉教授を頭に沢山の同窓生が見え、波崎の労災病院坂巻皓院長、県西総合病院二宅和夫院長、日立市からは鈴木亀太郎（昭10）鈴木雅美（昭20）の古顔にも参加頂いた。

久しぶりの会合とて酒間は快談で持ち切り到々カラオケ、手品、その他の騒ぎはそっちのけ。若い連中は夜半まで盃をあげたという。

県下各地に責任担当者を設け会員の動静と新名簿作成を早急に開始することを約した茂在幹事並びに関係若手会員に満腔の謝意を表す。

会長　丸山秀太郎（大9卒）

安房ゐのはな会

安房ゐのはな会（会長関谷正一先生・大13）は、3月19日(土)、館山市海幸苑で、石川清教授、藤村真示教授をお迎えして開催された。連休前の土曜日でしたので、出席会員は例年より少なかったのですが、両先生のお話に熱がこもり懇親会の時間にくい込む程でした。

懇親会は、安藤建治（昭6）先生の乾盃で始まり、最近に珍らしく会員の自己紹介があり、宴たけなわとなった。（出席25名）

この1年間の安房ゐのはな会の会員の動きは、中原毅（昭16）先生が昨年12月急逝、橋詰定明（昭30）氏が鴨川市立長狭国保病院長を辞し千葉へ転出、代って若手の中村宏（昭43）氏が同病院長に就任、白井忠臣（昭15）氏が鴨川エビハラ病院に勤務、山本健介（昭44）氏が鋸南病院から袖ヶ浦へ転出、と云った具合に勤務会員の動きが目立っている。

又、安房ゐのはな会々員が中核となって運営している安房医師会病院（副院長、磯山健一・専20、小谷庸・専24）は、傘下市町村の総合検診を通じて地域医療の中枢にあり、それは第一外科奥井教授、第三内科稲垣教授の全面的なバックアップがあってのもので、会員一同感謝の気持を常に忘れておりません。地域医療活動では、会員の手島一（専18）氏、原久弥（昭34）氏、西川義明（昭34）氏等がその担当理事として頑張っている。

（青木　謹・昭36）

近畿・阪奈和地区ゐのはな会

永らく沈滞していた近畿・阪奈和地区ゐのはな会が、去る4月5日、第21回日本医学会総会を機に久方振りに開催された。前回奈良で開催されてから6年ぶりの事である。この間、永らく当地区会長を務められた石田俊孝先生（大正11年卒）をはじめ、当地区最長老であった奈良の西村逸石先生（大3卒）等8名の会員を失った事は誠に惜しむべきであり、又、石田正一先生（昭21卒）等、御都合により他地区へ去られた会員もあって些か寂しい思いもあったが、一方若手の会員、特に国立循環器病センター開設以来、新進気鋭の同窓会員多数を当地区に迎える事が出来て、会員の平均年令も大いに若返り、再び活気をとり戻しつゝある昨今である。

扨、当日は、大学からは丁度病理学会で御来阪された井出源四郎学長をはじめ、吉田亮教授、近藤洋一郎教授、岩崎勇助教授をお迎えして、大阪市内茶臼山、普茶料理で知られた阪口楼なる料亭で開催の運びとなった。月初めの週日の夜と云う事で、特に開業第一線の先生方には誠に申訳ない日程であったが、それでも当地区の会としては先ずは盛会と云える22名の会員の参加があった。

開宴に先立ち、当地区新会長に小田寿雄先生（大14卒）を選出。小田新会長就任第一声としての挨拶と歓迎の辞があり、次いで最先輩瀬田信一先生（大13卒）の音頭による乾盃で開宴となった。

井出先生からは、千葉大学の現況と将来の構想の一端が披露され、又、ゐのはな同窓会の現状の説明と共に近々具体化される筈の同窓会館建設について協力方要請があった。当日朝4時に起床して来阪されたと云う井出先生の、少しも疲労の色を見せぬタフな御様子に大学の活力と活況を見る思いであった。吉田先生からは、ゐのはな観光案内と称して、最新の数多くのスライドを上映しながらキャンパスの現況を説明して頂いたが、永らく大学に御無沙汰している会員の中には隔世の感を覚えた方も多かったものと思われた。近藤教授は、若手教授としての苦労話の他に、痩身の思いをした最近の或る出来事に触れられたが、これには井出先生からも補足釈明があった。

他に岩崎助教授や、又、地元を代表して藤本教授にも御挨拶を頂く筈であったが、司会の不手際もあり、歓談の中に予定の時間も瞬く間にすぎて、又翌日も尚学会予定がある事とて失礼ながら割愛させて頂き、春宵の一刻を惜しみつつ次回の邂逅を期しながら9時早々に閉会となった。

（昭32卒・石川正士記）

長野県支部総会の記

総会は58年7月9日(土)午後4時より、松本市内の割烹松本館に於て、大学本部から井出学長、小林同窓会長、渡辺昌平教授の三先生をお迎えして、3年ぶりに開催さ

れ、出席者約40名で大変盛会でした。先ず物故会員に黙祷を捧げ、百瀬孝男支部長(昭6)の会務と会計報告があり、来賓大野松本市医師会長の祝詞の後記念講演に移る。

『なぜ、いま、寄生虫学なのか』
信州大学寄生虫学
小島荘明教授（昭40）

『肺癌治療の困難性』
千葉大学肺研
渡辺昌平教授（昭20）

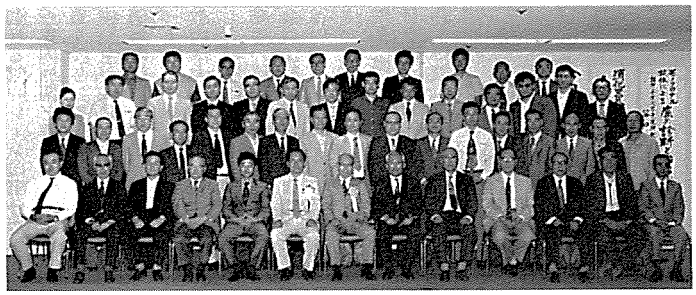
何れも第一線の医療に携わるわれわれの明日の診療に直ぐ役立つ貴重なお話を母校出身の先生方からお聞きする事が出来、深い感銘を受けました。

続いて席を替えて懇親会に移り、県下各地から参集された同窓生が、母校の最近の様子などお聞きしながら往時を偲び歓談、最年長の竹内丈夫先生（大14）から、信大の重松教授（昭39）、小島教授（昭40）を始め教室の若い先生（昭50）まで半世期の隔たりのある年令層の会員が相互の親睦を深め、宴酣わの間井出学長先生には『三髄、五臓、六腑』に就いての新説を漫談風にお話しいただき、会の雰囲気は盛り上りました。

又別室で行われた二次会では、小林会長(昭8)、田中幸夫会員(昭12)、森川不二男会員（昭19）等野球部のOBのメンバーから、千葉大の黄金時代(投手富士川君)に、宮武、水原等現役の黄金時代の慶應と互角に戦った話に花が咲き、名残は尽きなかったけれど再会を約して散会となりました。

武田　浩（昭18）記

埼玉ゐのはな会



58年7月17日(日)恒例の埼玉ゐのはな会を大宮で開きました。同窓会と云っても毎年の事ながら、学術講演会と云った方がよく、本年も午後3時から6時迄、みっちり勉強させられました。まず初めに新進気鋭の谷口克教授より「モノクロナル抗体による癌の診断と治療」の夢の様な話を、判り易く楽しく聞かせて戴いたあと、温厚な奥井勝二教授の消化器外科、特に肝・膵に於ける画像診断の中で、エコーが優れている事を多くの症例を持って示めされました。最後は松浦十四朗先生の「今日の医療問題について」前厚生省公衆衛生局長と云った役人の立場からのお話があり、我々開業医は勿論の事、医療費問題については、大学人と云えども、もはや安閑としてはいられない事を示唆されました。

引続いて懇親会となりましたが、本年は、若手の希望で立食パーティー形式にしました。例年ですと此の会は40名前後の集りですが今回は60名近くの申込みがあり、幹事を周章てさせましたが、立食パーティーでしたので狭いながら何とか切り抜ける事が出来ました。

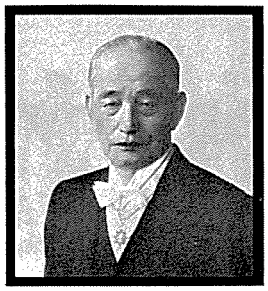
埼玉県医師会を代表する、松永・千代倉・萩原・新藤の諸先生等の昭和10年代卒の輪。お役人の松浦先生を中に、村浦（前県衛生部長）、関（大宮医師会長）の諸先生等、昭和20年前半卒の医療行政に熱心な人々の輪。埼玉医大の前田教授と奥井教授を中心とした、昭和20年後半卒の熟年グループ。谷口教授を囲んでの活気溢れる昭和40年代卒の集り等々、同門、同級、背中を合せての歓談が続きました。最後はやはり、上川名会長の計らいで、奥井・谷口教授を囲んでの畳の上の二次会となりました。

来年は是非熊谷でやりたいと、冠木先生（昭40年）等が意気込んでおられますので、楽しみです。

井上幸万（昭27年）

川名正義先生の憶い出

白幡静夫（昭和13年卒）



館山病院長川名正義先生には館山病院に入院加療中でしたが、7月6日逝去され、7月15日井出学長、相磯元学長、小林同窓会長、綿貫名誉教授、奥井第一外科教授等を始め大学関係者も多数出席されて準市葬で盛大に行われました。奥井教授から追悼文を書くように言われましたが、適当な先輩が沢山居られるのに僭越と思い乍らも同郷故かと思い直して引受けました。

先生は安房中から六高を経て昭和5年本学卒ですが、始めてお逢いしたのは昭和9年4月、旧病院の研究室でした。当時既に第一外科の医局長で堂々たる風格に先ず感心しました。学生時代の大半はボートで過したらしく、実習など殆ど出たことがないと言っておられました。借艇、借艇庫時代のボート部で、江戸川、尾久、向島を転々、金、森本、小林、朝岡等二高出の古強者達と鍛えた根性が後年の活動の源泉となったと思います。昭和10年伯父川名博夫院長の強請によって館山病院副院長、外科部長として就任されましたが、学究的で図書などもよく整備され研究会などにも意慾的でしたので郷土の後進学生がよく実習見学して居ました。このことは父祖伝来の親分肌の人柄に寄る処とも思われます。昭和19年には館山市・安房郡医師会長として戦時下地域医療活動に奔走して居られましたが、病院中庭には立派な防空壕があって艦載機の来襲中この壕内で手術したこともあり、又お家族の疎開された留守宅で燈火管制中呑んで日本の将来を議論したこともありました。この会長中の特筆すべき功績は安房地域に国民健康保険を発足させたことでしょう。県下全町村に実施されたのが17年後ですから如何に着想の早かったかが窺えます。

其の後は水泳、ヨット、ボートの各県会長や市社教委員、裁判所調停委員、県教育委員、県公安委員等の他ロータリー、ガバナー等等広く社会に貢献されました。此の中で県教育委員は自ら立候補して県下を遊説する等の選挙戦の結果当選したものであり、政治意慾の現われであったともみられるが、真の狙いは参議院ではなかったかと愚考します。然し最終的に全力投球されたのは昭和35年よりの県医師会長として、引続き日医代議員会議長としての医師会活動であったと思います。即ち定款、諸規定の全面改正から始めて運営機構を一変し対外的にも医師会の権限責務を明確にし、新しい県予算をもって癌、高血圧等成人病対策を企図する等でしたが、昭和36年の保険医総辞退の際の統率も、又日医一部役員紛糾の斡旋も余人に果し得たでしょうか。正に偉大な功績です。

以上のように医師会の他広く社会に貢献されたことは真に比類なく立派なものと言えましょう。同時に私達後進の啓発されたことも甚大であったと信じます。

やはり如何に意張られても真似の出来なかった大物だったなあと痛感する次第です。

故佐藤義房先生（大12卒）のこと

昨年（昭57・7・17）他界された佐藤義房先生の御遺族からその御一生の詳しい記録が編集部によせられたので抄出し御冥福をお祈りしたい。

佐藤先生は明治32年栃木県のお生れ、大正12年千葉医学専門学校を卒業。昭和18年より33年まで八戸赤十字病院長。その後も地域の福祉や医療に献身され、昭和51年に厚生大臣賞、八戸特別功労賞、昭和53年に青森県褒賞を受賞。死後叙勲で従五位勲四等瑞宝章を受けられた。(なお御長男の住所は次の如くであります。〒031　八戸市沢里二ッ屋1の32　佐藤博義)

西川喜作君（昭和30年卒）の遺著「輝やけ我が命の日々より」の発刊によせて

昭和30年卒の仲間の西川君が亡くなられてはや一年半が過ぎた。その遺著であり、斗病日誌であり、また彼が最後に目指していた「死の医学」の実践の記録が、ガンを宣告された精神科医の1000日という別題で新潮社より出版された。西川君は不幸にも40才台で罹患することは極めて少ない前立腺癌に48才でおかされ、種々の治療にもかかわらず、発病後二年半で亡くなられた。彼は多くの方も御承知のように極めて活動的で、業績も多く将来を嘱望された逸材であったが、若くして癌とわかり、転移が進行してゆく状態をみつめたときの心を思うと極めて厳粛な気持にならざるを得ない。3月25日の記録に死を宣告された夢をみたことが記されている。夢の中でも死をみつめて過してきた斗病の日々、これは健康なものには本当に判らないものだろう。

私が感心するのは西川君がこうした苦しい中から、本当に赤裸々な記録をつづり、それが読者を感動させ、しかも現代の医学、医療において欠けていた死の臨床についてすぐれた提言をしていることである。

此の記録が出版され、NHKテレビで放映されるにあたり努力された作家柳田邦男氏の述べられているように、彼が最後まで頑張ってきた活動こそ、その人生が密度濃くインテグレートされたものであると思う。この本は多くの問題を我々になげかけているだけに、個人々々によって得られるものは異なるであろうが、とくにつねに死と対決して行かなければならない医療関係者には是非読んでほしいものと云えよう。

片山　喬（昭30卒）

書評

薬学向ラテン語入門

内海　滉　著

看護学部の内海教授（昭30年卒）が薬学生のラテン語学習のために編んだ入門書である。しかし、本書は数年前に出た「医科向ラテン語入門（南江堂）」の改訂版と考えて差しつかえない。「医科向」よりもテキスト内容が増え、各章毎に単語集、訳文、文法解説および練習問題の付いた本書の方が独習者の教本には適している。テキストの中には、ヨーロッパの初等ラテン語教本でおなじみの Nauta et Puella（水夫と少女）をはじめ、ボードレールの詩、アベ・マリアの歌詩付楽譜等がちりばめられ、とかく無味乾燥となる語学書に潤いを与えている。文法の解説も語尾変化表の羅列に陥ることなくラテン文法の基本が過不足なく懇切丁寧に述べられている。本書は、死語とはなっても今日なお『人間の心の中に、人間の思考の中に西欧の文化を担いつ、（序文より引用）』脈々と流れているラテン語の世界へと我々を導いてくれる優れた水先案内人となるであろう。

（南江堂・一四〇〇円）（A・T）

船橋市立医療センター

院長　茂又　眞裕（昭和22卒）

一、病院建設迄の経過

船橋市は東京のベッドタウンとして近年人口増加が続き9月22日には50万都市となりました。昭和40年代の後半には急激な人口増加のため医療施設の需給のバランスがくずれ夜間には患者のたらい廻し問題などがあり、市ではこれに対処するため、48年12月船橋市夜間急病診療所を開設し、1日平均30人以上の急患の診療にあたり現在に至っています。この患者の中には更に適切な治療を受けなければならない患者がいて、より高度な治療を受けられる病院建設が切望されていた訳であります。当初は救急医療を中心として、市と医師会の共同建設を考えましたが許可が得られず、また外科系の救急患者の減少などから難行していました。そこで市側では急病・救急対策を中心とする包括的医療とまた市内の中核的基幹病院としての役割をおびるべき機能を兼ね備えた病院の建設構想が検討され、56年7月大橋市長が就任後この事業を最優先で取組み、医療公社による運営を取り止め市立病院としての性格づけが行なわれて今日に至りました。

二、病院の規模と医療スタッフ

敷地面積23,755㎡、建築面積4598.55㎡、地上6階建で、診療科としては内科・小児科・外科・整形外科・耳鼻咽喉科・産婦人科・眼科・泌尿器科・脳神経外科・麻酔科です。病床数は206床ですが開院時は120床でスタートしました。

常勤医師22名で院長は私、茂又（22年卒）が、副院長は佐藤裕俊君（38年卒）、診療局長は小沢俊君（43年卒）でさらに本学からは内科・外科・小児科・整形外科・耳鼻咽喉科、泌尿器科で、他大学からは産婦人科、眼科（東医大）、脳神経外科（東京医歯大）、麻酔科（慶応大）の先生方が来てくれました。以上のスタッフで救急医療と基幹病院としての仕事をおこなう訳ですが、さらに一つの特徴と船橋市医師会員の熱烈な希望により一部開放型病床を設置いたしました。開業医との幅広い意見の交換が出来、地域医療の向上に寄与することは間違いないと思う次第です。

新しく発足する病院ですので色色と不備な点が多いと思いますが今後同窓会の諸先生方の温かい御指導、御鞭撻をお願い申し上げる次第です。

ある卒業試験

（竹内　勝先生のこと）

志田　隆三（昭和20専卒）

太平洋戦争の戦況も目に見えて不利になってきた昭和20年3月、私達は繰上げ卒業で軍医学校に送られることになり、形ばかりの卒業試験が行われた。皮膚科の試験の日だった。付焼刃の勉強で、どんな問題が出るかと思いながら席に着いた私達に、竹内先生は答案用紙を配ると、黒板に「所感を述べよ」と書かれた。一瞬あっけにとられた私達に先生は「何でも思っていることを書きなさい。『皇国ノ興廃此ノ一戦ニ在リ』と思ったらそう書きなさい。」と言われた。一夜漬の知識はスーッと頭から消えていった。

私は今でも折にふれて思い出す文章で、中学二年の国語教科書にのっていた、三浦梅園が弟子達を訓すために書いたと言われる「誠」という文章の冒頭の『一勺の水を海に入れて、海の水増せりといふは愚なり。増さずといふは妄なり。増すと増さざるとは己に非ざる所、敢てその辨へを求めずして可なり。己にある所の誠を尽す、之れ君子の道なり。』という所から書き起して、人が見ていても、見ていなくても、自分のやるべきことはやる誠実な人生を送りたい。というようなことを書いた。

時間がきて答案用紙を集められてから先生は「老婆心ながら」と前置きして「諸君はやがて軍医となって戦場に行かれると思うが、諸君の前には、日本人もアメリカ人もない。諸君の対象は病める人だけであります。敵、味方の区別なく、医師としての良心にしたがって治療に専心して下さい。」と仰言った。殺伐な世の中で、一人でも多くの敵を殺すことばかり教えられ、日々の食物をあさることに腐心していた当時、このようなすがすがしい医の倫理を諭され、私は目から鱗が落ちるというか、目の前が開けたような気がして、入隊前の数日、色々な本をむさぼるように読んだ。

あれから40年、敗戦後、戦勝国による戦争裁判で、捕虜虐待の罪に問われた軍医が数多くあったことをきくにつけても、また最近「悪魔の飽食」などという言葉をきくにつけても、竹内先生の言葉はつくづく有難い言葉だったと思う。

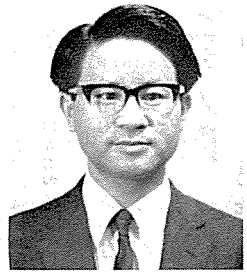
教授就任挨拶

微生物学第一講座

清水文七（昭和33卒）

私は昭和33年に千葉大学医学部卒業後、川喜田教授のもとで大学院生として研究生活に入りました。その後外国留学を経て、桑田教授の下で講師として3年余を過しました。昭和47年に厚生省国立予防衛生研究所に出向し、ウイルスリケッチア部においてウイルスの研究を行ってきました。研究所においては基礎研究ではありましたが、大学とはことなった雰囲気があり貴重な体験をいたしました。

次に、私の研究テーマですが、卒後しばらく病原細菌やウイルスの分離同定などの基礎技術の習得につとめた後、ウイルス学に転じ、ウイルスの病原性について一貫して研究してきました。ウイルスによって引き起される細胞破壊作用や高分子合成阻害作用についての生化学的な研究が主題で、最近は特に向神経性ウイルスの蛋白質の細胞内生合成とそれらの役割について分析を行ってきました。



さて、今後の当講座の方針ですが、常に病原ウイルスを対象として、近年盛んになってきました遺伝子工学などの技術も導入して病原性の本態を追求していきたいと思っています。同時に腫瘍ウイルスによって悪性変換された細胞上の腫瘍抗原についても手をそめたいと考えております。いずれの研究においても、ウイルス感染を宿主側から眺めることになりますので細胞生物学的な色彩をもつと考えています。さらに医微生物学の応用面であります臨床ウイルス学は医学教育上大切な分野ですので臨床研究室との協力のもとに研究を推進し、教育に反映させていきたいと考えています。

これからは由緒ある当講座において微力ながら努力いたしたいと念じておりますので、どうか諸先生方のご支援をお願いいたします。

君津中央病院長に就任して

唐木清一（昭和28卒）

昭和58年4月、私は三輪清三院長の勇退により君津中央病院の院長を拝命致しました。

これも前院長の心よりの御推薦と、病院内外の同窓の諸先輩、同僚等の各位の御厚情によるものと厚く感謝申し上げます。

もとより浅学菲才、身にあまる大任ではありますが、病院全職員とともに地域医療のため日々努力して行く所存であります。

さて当院は昭和58年10月、創立45周年を迎えました。この間、歴代の院長はじめ勤務された医師はすべて本学の医局出身者で占められ、これらの先人の積み重ねられた業績の結果、今や木更津市桜井の丘上に地下一階、地上六、七階の白亜の建物が聳立し、常勤医師53名、職員総数500余名を擁し、病床数585床と、千葉県南随一の綜合病院へと発展しました。

診療圏は千葉県南部全域に及び高度医療、特殊医療、救急医療を含み、住民に親しまれ、信頼される地域基幹病院と成長しつつあります。

一方、本学の重要な臨床研修病院としても一層の充実を計っておりますので、大学当局はじめ同窓各位の益々の御指導、御協力を御願い申し上げます。

終りに院長就任早々、同門の大先輩鈴木五郎先生に「その座に於て医の本道をふみ、存分の活躍をする様に」と、御祝詞を頂き、この言葉を座右の銘として、今後院長として身を処して行きたいと思っております。何卒、よろしく御願い申し上げます。

祝・叙勲表彰

春の叙勲

勲二等瑞宝章　会沢太冲殿（千大昭和13卒）

秋の叙勲

勲二等瑞宝章　飯田政雄殿（千大昭和12卒）

勲二等瑞宝章　北村　武殿（千大昭和13卒）

勲四等旭日小綬章　角田富雄殿（千大昭和13卒）

勲四等瑞宝章　大塚信義殿（千大昭和16・3卒）

勲五等双光旭日章　柳澤文秋殿（千大昭和11卒）

勲五等双光旭日章　岡部豊作殿（千大昭和13卒）

勲五等双光旭日章　千代倉俊夫殿（千大昭和15卒）

千葉県知事賞　池田　博殿（千大専昭和18卒）

千葉県知事賞　中山善三郎殿（千大昭和28卒）

人事異動

昭和58年4月1日～昭和58年12月31日

4月1日付

集中治療部講師　橘川征夫　昭45卒

肺外科講師　木村秀樹　昭48卒

耳鼻科講師　林崎勝武　昭44卒

微生物学(二)教授　加藤　巌　北大・昭25卒

5月1日付

肺研病理講師　栗山喬之　昭43卒

二内科教授　吉田　尚　東大・昭29卒

5月16日付

二解剖助教授　豊田二美枝　お茶大・昭44卒

6月1日付

二解剖講師　外山芳郎　東農工大・昭45卒

一解剖助教授　門田朋子　阪大・昭42卒

二外科講師　原　輝彦　昭39卒

整形外科講師　北原　宏　昭43卒

7月1日付

一外科講師　大原啓介　昭37卒

8月16日付

一内科講師　税所宏光　昭40卒

9月1日付

微生物学(一)教授　清水文七　昭33卒

10月1日付

呼吸器科講師　長尾啓一　昭47卒

泌尿器科講師　村上光右　昭47卒

11月16日付

検査部助教授　中　甫　理大・昭43卒

略歴

唐木清一

昭和2年12月10日生

昭和28年　千葉医科大学卒

昭和29年　千葉大学第一外科入局

昭和35年　文部教官

昭和35年8月　君津中央病院胸部外科医長

昭和38年9月　外科医長

昭和44年4月　医務局長

昭和54年4月　副院長

昭和58年4月　院長

昭和42年4月～昭和50年3月　千葉大学医学部非常勤講師

編集後記

台風で屋根が飛んで二ヶ月近く雨が降る度に苦しんだ人が、ようやく修理が終った時の思いを「屋根の下に眠るとはこんなに安らかなことであるかと、目をつむるごとに感謝の気持が湧くのを抑え難かった。」と書いていた。母校や同窓会は屋根の様なもので存在して当り前、壊れたら困るものの一つであろう。四金会への出席の悪さが話題になることもあるが、それも屋根の一種と考えれば目くじらを立てて論ずるまでもない。しかし、学内の者がもう少し四金会に出てくれればと何時も考えてはいる。

奥井編集長も私も近頃異常に多忙で、言いわけがましいがこの号をまとめ上げるのに随分と苦労した。嬉しい悲鳴は原稿の集り過ぎで、今回は八頁建にしてまだ残り、何人かの方の原稿はお叱りを覚悟で次号に廻させていただいた。すぐ次号をまとめますので少々時間を与えていただきたい。おわびまで。

（村山　智）